

## CHI2008 参加報告

小松 孝徳（信州大学 ファイバーナノテク国際若手研究者育成拠点）

### 概要:

Human-Computer Interaction およびインタフェースに関するトップカンフェレンスの一つである CHI2008 (The 26<sup>th</sup> Annual CHI Conference on Human Factors in Computing Systems)が、4/5 から 4/10 の 6 日間、イタリアのフィレンツェで開催された。4/5,6 の前半二日間はワークショップやレクチャーコースなどが集中的に開催されていたため、実質的なセッションは 4/7 から 10 までの 4 日間で行われた。会場でのプログラム委員長の報告によると、会議参加者は約 2300 人で、そのうち 47% はヨーロッパ、44% はアメリカ、7% はアジアからの参加者であった。また論文の投稿件数は（すべてのカテゴリを合わせて）2000 件を超え、そのうち約 25% に相当する約 500 件の論文が採択されたとのことである。具体的には、Paper セッションでは 714 件中 157 件が採択（22%）、Note セッションでは、341 件中 61 件（18%）、Work-in-Progress セッションでは 414 件中 157 件が採択（38%）と、いずれのセッションにおいても例年よりも採択率が低かったように感じた（ヨーロッパでの会議開催の影響か?）。

### 会議内容の紹介:

CHI の会場はフィレンツェ中心部に位置する「Basso 要塞」という歴史的な史跡の内部に作られた展示場であった。会場の雰囲気としては特にイタリアらしさを感じることなく、どちらかといえばアメリカにいるような感覚であった。そのため、自分がどこの国に来ているのか一

瞬忘れてしまい、会場の外に出た時にイタリアにいることに気づくような状態であった。

CHI での一日は朝一番に行われる「CHI Madness」セッションから始まる。このセッションは、その日に口頭発表を行う全ての講演者が 30 秒で自分の研究を紹介するものであり、7 個以上のセッションが平行で進行する CHI において聴講したい講演を探すのには非常に好都合なセッションである。一発芸(?)、コント、テレビショッピングに近いノリで自らの研究を紹介する講演者もあり、朝一番で完全に起きていない頭を覚醒させるにはちょうど良いセッションであるといえる。このセッションの後、参加者はそれぞれに聴講したいセッションに向かっていく。以下に、私が聴講した中で個人的に興味深かった講演のいくつかを紹介する。



写真 1: Basso 要塞内での CHI の大きな看板

## **Mischeif: Supporting Remote Teaching in Developing Regions**

**(Microsoft Research Asia の Moraveji 氏ほか):** 小学校などの教室にいる生徒全員にマウスを持たせて、教室正面に取り付けられた大画面上にて授業を進めることができるシステムの紹介。大勢で一つのパソコンを囲むよりも、大勢がそれぞれマウスを持った方が効果的な学習が期待できるとの仮説に基づいた研究アプローチであり、主に発展途上国の学校への応用を前提としている。生徒は画面上の様々なオブジェクトを自由にポイントすることができ、また教師も生徒のマウスの動きをフリーズさせるなどの操作を行うことができ、生徒の授業への没入感を統制することが可能となっていた。身近な技術を効率的なアプリケーションへと昇華させた「目からウロコ」的なシステムであるといえる。なお、この研究の詳細は下記のウェブサイトを参照されたい。

<http://mousemischief.org/drupal/>

**Impact of Screen Size on Performance, Awareness, and User Satisfaction With Adaptive Graphical User Interfaces (ブリティッシュコロンビア大の Findlater 氏ほか):** デスクトップサイズの端末上でこれまで有効とされた適応的インタフェースが PDA のような小型端末においても有効なのか否かを調査した研究である。その結果、ユーザのパフォーマンス、満足度は小型端末上でも高い評価を得ていたものの、やはり画面の小ささからか、メニュー上の細かいアイテムへの意識度は下がってしまい、新しい機能などを学習する際にはより困難さが増すであろうと報告されていた。

**What Is Good? – A Comparison Between the Quality Criteria Used in Design and Science (アイトホーフエン工科大の Bartneck 氏):** この講演は alt.chi と名付けられた、いわゆる special session の枠で発表された。セッション名は「META-CHI」。CHI ではどのような論文が採択されやすく、それによる問題点など、CHI 自体から一歩引いたメタ的な目線で話し合うというセッションであった。このようなセッションが採択されることに、自己批判をも許容できる CHI の懐の深さ、や健全さを感じた。Bartneck 氏の講演は、デザイナーと科学者との間の用語の使用法についての軋轢(?)や main proceeding と extended abstract の扱いの差についての現状を指摘し、これらを共存させる方向に CHI は動かなければと主張していた(発表後には、非常に多くの拍手が沸き起こっていたのも印象的であった)。

**In-Car GPS Navigation: Engagement with and Disengagement from the Environment (コーネル大の Leshed 氏ほか):** カーナビが運転者(ユーザ)に及ぼす影響について、ユーザと外界との結び付きを中心に解析した観察結果の報告である。結果としては、システムがユーザの欲求にあうような目的地を検索できた場合(例。空腹時にレストランを検索して、望み通りのレストランを検索できた場合)には、ユーザと外界との結びつきが強まり、案内に従って順調に走行している際には結びつきが弱まるといった実験結果が報告されていた。日本のカーナビよりも機能的に劣るアメリカのカーナビを発表中にみていると、カーナビ大国と呼ばれる日本も CHI 研究分野でもっとアピールする必要があるのでは

と考えてしまった(正直なところを言えば、何かの悔しさを感じたのも事実)。

### **The Cost of Interrupted Work: More Speed and Stress (カリフォルニア大学アーバイン校の Mark 氏ほか)**

この論文は「Don't Interrupt Me!」という非常にユニークな名前を冠されたテクニカルセッションで発表された。近年増加するインスタントメッセージやメール着信お知らせ機能などが、ユーザーに与える影響を考察した論文を集めたセッションである。その一つである Mark 氏の発表では、そのような機能による作業の中断が実際のユーザーのタスクに与える影響が報告されていた。その結果は非常に興味深く、お知らせ機能などの中断があった場合の方が、中断がない場合に比べて、結果として作業が早く終了していたことが報告されていた。ただ、その対価としてなのか、その際にはより多くのストレス、より高いフラストレーション、時間のプレッシャーを同時に感じていたことも報告されていた。



写真 2: 丘から見下ろしたフィレンツェ市街

### **全体的な印象:**

先にも述べたように、常に 7 個以上のセッションが平行で進行している CHI に参加する上では、やはり「CHI Madness」セッションに出

るだけでは、「面白かった!」と満足できる発表を見つけるのは難しいといえる。やはりノートパソコンを持参し、空いた時間に DVD の proceedings で気になる論文を読んでから、その発表に参加するというスタンスを取るのが最良の方法であると思われる(また、CHI では発表を聴講するよりも、その論文を熟読する場合の方が面白いと感じることが多いと、個人的には感じている)。来年度以降の CHI に参加される方は、是非とも DVD ドライブの持参での参加をお勧めする。私の場合、持参したノートパソコンのドライブがなぜか使えなくなってしまい、あまり効率的に発表を聴講することができず、この点については悔いが残っている。

CHI2008 に参加して感じた大きな研究の流れとしては、CHI の持つ技術を、発展途上国、要介護者やホームレスなどの社会的弱者、持続可能な社会の構築などに応用しようという試みが増えていることであろうか。情報技術を含めた技術の発展が生んだ「格差」の問題を CHI の技術で解決しようという心意気や問題意識は日本人研究者にはあまりない発想であり、大変意義深いと感じた。その一方、開発したシステムをとりあえず何かに応用しなければという「キラーアプリケーション探し」の過程において、このような社会問題に注目してみたという早急さを感じたのも確かである。

来年の CHI2009 はボストンでの開催となるようである。また動画での研究の投稿などの新しい試みが予定されているようなので、詳しくは下記の URL を参照されたい。

<http://www.chi2009.org>